

箱根駅伝予選会

第97回東京箱根間往復大学駅伝（箱根駅伝、来年1月2、3日）の出場権10枠を懸けた予選会が17日、東京・陸上自衛隊立川駐屯地の周回コース（ハーフマラソン、21.0975キロ）で46校が参加して行われ、上武大は14位と

なり2年連続で本戦切符を逃した。各校上位10人の合計タイムで争い、上武は10時間36分44秒だった。県勢はほかに、育英大が11時間1分16秒で30位、高崎経大が11時間35分28秒で33位だった。例年は駐屯地をスタートし国営昭和記念公園にゴールしていたが、今年は新型コロナウイルスの影響でコースを変更、無観客で実施した。

関連記事 22面

上武大 14位 本戦逃す



予選会で力走する各校の選手たち。陸上自衛隊立川駐屯地周回コース（代表撮影）

周囲の速さ 認識上回る

上武大にとって固定観念が壊れるレースだった。主力から中間層まで設定タイムをクリアし、予選を通過できると踏んでいた10時間39分台を大きく上回る結果だった。しかしふたを開ければ、10位専大との差は2分45秒。近藤重勝監督は上毛新聞の取材に「選手は1

00パーセント力を発揮してくれなかった。周囲のレベルが上がりと、今までの基準を変えないといけない」と予選会の激化を感じていた。今年はず屯地内を周回する平たんなコース。降雨はあったが、気温は11度前後でレースの高速化が予想された。

上武も前半から設定タイムを上回るペースを刻み、後半も粘りを見せた。フル1で走った2年生の村上航

大はチームトップの1時間2分1秒でタイムを稼ぎ、中間層も崩れずにまとまっていた。

しかし周囲の速さが上武の認識を上回った。岩崎大洋主将は「上武はたつき上げの集団。レースの高速化によって持ちタイムが結果に直接反映された」と振り返った。

順大などの本戦常連校が上位に入った。一方で、初出場を狙う麗沢大（13位）

や駿河台大（15位）など近年力を付けている大学も台頭する。上武は中間層の底上げなど、チーム力のさらなる向上を余儀なくされるだろう。村上は「今までと同じ意識で取り組んでいてはだめ。チームの設定ペースも見直し、それに見合ったトレーニングが必要」と話し、岩崎は「後輩には2年連続で落ちた事実を慣れず、自分の実力の概念を覆してほしい」と託した。

スタート前に打ち合わせをする上武大

